

ブーゼによるマイスナーの簿記の解説

百瀬 房徳

I 序

マイスナー (S.G.Meissner) は、1803年にオーデル川に臨むシュレーゼンの中心都市プレスラウ (1945年までドイツ領) において「新たに考案されたドイツ式簿記 (Neuer fundene Deutsche Buchhalterey)」を出版した。

ブーゼ (G.H.Buse) は、マイスナーが扱っている単式簿記、複式簿記、イギリス式簿記およびドイツ式簿記について、それぞれの特徴を論じており、最終的にドイツ式簿記を創設している。

複式簿記は、イタリアを源として発展し、ヨーロッパ全域へと広がりを見せた簿記である。単式簿記は、小規模事業へ適用されるために複式簿記が簡略化されたものである。イギリスにおいては、ジョーンズにより改良されたイギリス式簿記が登場してくる。この簿記は、複式簿記のうち日記帳および仕訳帳を日記帳のなかで複合的に融和させたところの「仕訳帳の日記帳」を特徴とする。それ故、簿記のシステムとしては、形式的には単式簿記 (簡略化された複式簿記) となっているが、内容的には複式記入を基礎とした複式簿記である。

マイスナーは、このジョーンズのイギリス式簿記を摂取し、ドイツ式簿記を創設している。したがって、このドイツ式簿記は、単式簿記、複式簿記およびイギリス式簿記を融合させて、総合的に構築しているといえる。ブーゼは、当稿を完成するに際して、マイスナー論考「新たに考案されたドイツ式簿記」

(1803年) に従って、順次解説している。このマイスナーの著作は、30年を経て、ベルリンにおいて「イタリア式、イギリス式およびドイツ式の簿記 (Die italienische, englische und deutsche Doppelte Buchhaltung)」として内容を変えて改訂版が刊行されているので、詳細は当著に譲る。

尚、ブーゼによる論述の引用箇所は本文の中において括弧で示している。

II マイスナーの新しく創設した簿記

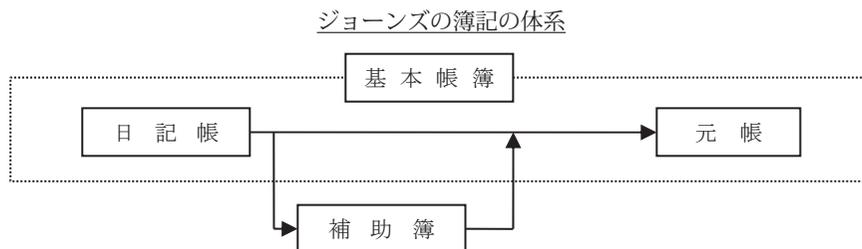
マイスナーは、ジョーンズのイギリス式簿記の課題、またはジョーンズのイギリス式簿記の内容の吟味から出発している。ジョーンズは、単式簿記 (簡略化された複式簿記) および複式簿記を概観し、目的適合的な方法で相互に結合させている。それ故、ジョーンズの簿記は、そこで、最も容易でかつ最も確実なシステムを完成させているとする。(s.511)

このようなジョーンズの簿記を摂取し、マイスナーはドイツ式簿記を展開しようとしている¹⁾。

1. 著書の題名そのものに対する評価

ジョーンズは著書“Jones’s English System of Bookkeeping by Single and Double Entry”をイギリスのプリストルにおいて刊行した。当著においては単式簿記 (簡略化された複式簿記) と複式簿記を組み合わせ、かつ統合してジョーンズのイギリス式簿記が著されている²⁾。その簿記のシステムは下記の「図表-1」の通りである。

図表-1



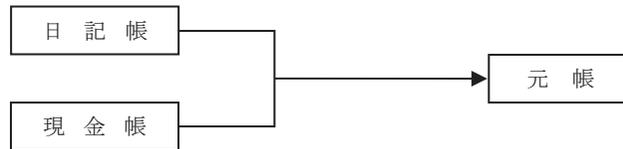
このジョーンズのシステムでは、システムの形式としては単式簿記である。その日記帳に特徴があり、システムは一貫して複式記入が貫かれている。日記帳より元帳の諸勘定への転記は複式簿記そのものである。それ故、勘定では借方と貸方が設けられており、勘定への入と出が記入されるよう設計されている。ブーゼは、この日記帳形式を実際に新しく

発見したのかどうか、またはマイスナーはこの日記帳のシェーマを基礎に据えたのかであるとする。この疑問に答えることから、マイスナーは自身最高のかたちで決断することができよう。(s.511)

マイスナーのドイツ式簿記はジョーンズのイギリス式簿記を摂取しており、そのシステムは下記の「図表-2」の通りである。

図表-2

マイスナーのドイツ式簿記の体系



ここでは、日記帳および日記帳のなかの現金取引を抽出して示す現金帳に特徴があり、ジョーンズのイギリス式簿記が摂取されている。マイスナーの日記帳および現金帳では取引の項目が記述式により示され、当該項目が借方なのか、それとも貸方なのか記載内容の右上に大きな文字で示されている。そして、仕訳の相対する項目が何であるかは取引内容を示す文言で示されている³⁾。それ故、文章形式で日記帳および現金帳は記載されているが、ジョーンズの日記帳（仕訳帳の日記帳）と機能的には同様であるといえる。したがって、日記帳および現金帳の中で仕訳がおこなわれているため、形式としては、仕訳帳は省略され、日記帳および現金帳より元帳の諸勘定へと転記される。最も特徴が浮彫りにされるのは、ジョーンズの日記帳とマイスナーの日記帳および現金帳である⁴⁾。ジョーンズに対応して、マイスナーは日記帳および現金帳において取引を文章形式で示すが、日記帳および現金帳は、いずれにしても、複式簿記がもつ複式記入の形式より乖離したものではない。それ故、ジョーンズの日記帳を摂取しようとした努力は認められる。

ブーゼは、このドイツ式簿記は、単式および複式の方法を目的適合的な方法により接合するか、または、もともとこの試みは、複式簿記の原則（優れた

簿記）を単式簿記へと導き、実践上の取引で運用するところの試みをすべきものとした。そして、この試みは、確実に、非常に優れたできばえであるとする。その帰結として、ブーゼは、マイスナーのドイツ式簿記は、まったくイギリスの姉妹の片割れのように、ささやかな報告を通じて際だっているとしている。(s.513) ただし、ブーゼは、マイスナーの判断からして、単式、複式、イギリス式、そして、最終的に彼固有のいわゆるドイツ式に至っているとする。だが、このことは、彼独自の優れているか、および目的適合的であるか、それとも、必要性はわずかなのかを見ることを要している。(s.514)

2. マイスナーの帳簿の内容

1) 商業帳簿の内容一般

マイスナーは、簿記とは、事業が基礎的資金(Grundfonto)に関して正確な計算を行う学問であるとする。それ故、その計算は十分なすべての支出および収入の概観、並びに、貨幣による他の価値ある事象(Werthabenden Sache)、すべての債務(Schulden)および相対する債務(Gegenschulden)、効用(Nutzen)および損傷(Schaden)、および一般に事業すべての状況(Zustand)に関連するところ

1) 片岡泰彦、「マイスナーの簿記書」に関する一考察、2011年、大東文化大学経済論集、S.1

2) 片岡泰彦、前掲論文、s.2

3) 片岡泰彦、前掲論文、s.7

4) 片岡泰彦、前掲論文、s.7

のすべての事象を開示することに繋がろうとする。(s.515)

この解明には、複式簿記が、いわゆる単純化されるか、または短縮化された・・・簿記の方法または本来の名称で理解されるところの古いイタリアの方式を呈示するところのあらゆる事項に関連するとする。したがって、マイスナーは自己が解説する単式簿記に分類されようとも、まったくかけ離れることなく提供しているとする。(s.516)

ブーゼは、マイスナーにおける簿記の記入方法について下記のように総括している。(s.570)：

- a) 取引の各々の種類での一般的な実務上の使用可能性 (Anwendbarkeit)
- b) すべての財産目録、および誤りの最大の回避 (Vermeidung)、容易でかつ迅速なそれらの発見 (Auffindung)、およびこれらを気付かれずにもたらすことの不可能さ (Unmöglichkeit)
- c) 商業帳簿の正確性 (Richtigkeit) および完全性 (Vollständigkeit)、およびこれらの最初の注釈書 (Annotationsbuch) との正確な一致 (genau Ubereinigung)
- d) すべての事業部門 (Zweigen der Handlung) における利益および損失の明瞭な立証 (Nachweisung)
- e) 元帳への短くかつ確実なすべての項目の転記 (Uebertragung) および容易でその現在の締切 (Abschluss)

上述の諸原則 (Sätze) が、マイスナーにより打ち立てられているが、様々な簿記の方法の検証 (Prüfung) の基礎となっているのである。マイスナーは、ところで、この作成に取りかかる以前に、各々の方法について簡単ではあるが、十分な説明をしている。それについて、下記のようにしめしている。

2) 単式簿記と複式簿記の区分について

単式簿記とは、複式簿記に比して、単純に人名に対する勘定のみで、したがって、まったく、主人の勘定 (Principal=Conto) または財産の勘定 (Vermögens=Conto) および損益勘定 (Gewinn=und

Verlust=Conto) を含まない簿記をいう。(s.517)⁵⁾ それに対して、複式簿記では、複式記入により、事業により生まれるすべての勘定を記録し、最終的に、その勘定を締切り、決算を行い、財産の勘定および損益を算出する。その損益は資本金勘定 (主人の勘定) へともたらされる。

3) 新しいドイツ式簿記についての提言

マイスナーは、ドイツ式簿記について下記の通り総括している (s.517~518)；

- a) 日記帳と現金帳は、従来のように適切に分離し、両者は2つのページで借方と貸方に付けるところの複式記入を用いる⁶⁾。
- b) 日記帳において、各々の項目を複式で振替え、即ち、債務者を左側へ、そしてそれに対応する債権者を右側へ、そのために苦勞して仕訳帳記入を残し、帳簿の締切に際して前に書き付けた借方と貸方の項目の合計では、正確な複式記入の証拠のために役立つ残高を保持しよう。
- c) 現金帳は、従来のように、それ自体に対して存在する現金勘定としての見出しのもとで、すべての収入項目について左側のページで借方記入し、そしてすべての支出項目について右側のページで貸方記入する。その際、両ページの平均化または残高としてその都度の現金在高を示している。
- d) 日記帳および現金帳の項目は、月々元帳において適切な勘定をもたらし、さらに、染色等々の特別な勘定およびその他の項目に対して一般的な商品勘定を設ける。しかし、その勘定は個別の商品勘定の場所を設けられていないので、それ自体でその都度の倉庫の在高が算出されるわけではない。
- e) マイスナーの現金帳はまったく我々の従来見してきたものであり、収入および支出の月々の転記により、元帳の現金勘定へ適切に組み入れている。
- f) 元帳に関しては、詳細に、それ自体重要な人名による債務者勘定を含むことで十分である。それにより、個別の帳簿をこれが故

5) 片岡泰彦、前掲論文、s.6

6) 片岡泰彦、前掲論文、s.9

になくてもすむようにするが、これに対して、当然財および補助の計算書（Güter und Hilfs=Rechnungen）について、多くの、広範囲の記録簿のように、日記帳および現金帳の項目よりもたらされ、我々の従来のものより苦勞をかけて作成される。

そこで、プーゼは、上記より、下記の事項が帰結されるとする。（s.517）

- (1) マイスナーの簿記の方法は、確かに、ジョーンズのそれよりも目的合理的であるが、しかし、本来の完全な複式簿記よりも完全とはみられず、いわゆる単式または簡略化された複式簿記の日記帳および現金帳を、全く単純化して、すべてにおいて撰取し、前進させるべく役立てている。
- (2) この簿記の方法を、従来と同様に、月ごとに、日記帳および現金帳の合計によって貸借平均させるとすれば、さらに、改善し、または完全なものになるに違いない。
- (3) 単式、複式およびイギリス式の方法による、若干の商業取引の帳簿への記入：
クリュウガー（Krüger）の指導書による処理か

ら複式簿記を創出し、そして私が実践において、当著作のもっているものを最新の簿記の方法の手引または事業のプランにおいて同様に衆知せしめた。これらの取引の実践上の表現は、そのために必要とする元帳、ならびに、その解説は、もちろん正確で、理解しやすく、十分に明確にこの簿記の方法の考え方に由来する処理方法を衆知せしめることにより、彼の読者へ、同様に、立ち位置を明らかにしている。

- (4) 単式、複式、イギリス式およびドイツ式の簿記の比較および検証：
これが彼によって試みられている。これは、この論文の主要な成果をなすものであり、ここでは、これらを下記で抜粋するかたちで知って頂くことに役立てているとしている。

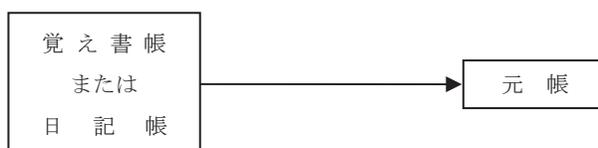
Ⅲ 単式簿記および複式簿記

(1) 単式簿記

単式簿記は、覚え書帳（Notiz）または日記帳（Memorial）より直接元帳へもたらされる簿記のシステムである。このシステムは下記の「図表－3」の通りである。

図表－3

単式簿記



このシステムでは、仕訳帳が省略されているが、複式による仕訳の機能は、帳簿ではみられないが、基底となっている。したがって、内容としては簡略化された複式簿記といえる。この簿記は、いずれにしても、小規模事業に限り適用されるそれであろう。

プーゼによれば、マイスナーの単式簿記の特徴は、下記の通りである。（s.519）

- a) 実務においては取引で一般に運用可能である。なぜならば、単式簿記は単純に債務およ

び相対する債務を書き留めることにある。この書留めたものだけを、注意してかつ几帳面に記載しなければならない⁷⁾。

- b) 誤りの早期発見および可能な限りのその回避は、間違っただまならば、それらを守ることができないからである⁸⁾。
- c) 調和のとれた帳簿の関係および個々の覚え書帳との相互の密接な関連性。ある項目が元帳へ不当に転記されるか、または誤りを、帳簿

7) 片岡泰彦、前掲論文、s.6

8) 片岡泰彦、前掲論文、s.3

を前へ進める際に認識する機会をこの時にもたないならば、その項目を覚え書帳に記入するのを忘れたことになる⁹⁾。

- d) 損益を、確かに、決算に際して、一般に示すのであるが、しかし、ジョーンズを撰取しているため、個別の部分について示していない¹⁰⁾。それ故、このような機会に、骨が折れるばかりでなく、不明確でもあるが、すべての収入および支出を個別に記入しなければならない。なぜならば、容易に何らかが忘れられるし、同様に、騙され、しかるべき記入関係を間違えることがあるからである。これらを通じて、誤りが発見される。
- e) 元帳への転記は容易でかつ意義がある。しか

し、元帳は、すでに論じたように、誤りを避けようとすれば、非常に正確に作成されなければならない¹¹⁾。

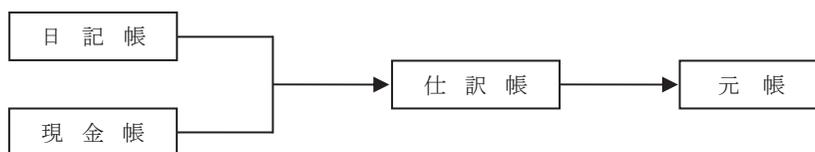
これらの特徴からして、マイスナーは、正確な記帳と不正および誤りに特別配慮した帳簿の作成を考えていたといえる。

(2) 複式簿記

複式簿記は、イタリアにおいて発展し、ヨーロッパへと伝播した簿記である。この簿記は、日記帳、仕訳帳および元帳を備えた簿記のシステムである。それは下記の「図表－4」の通りである。

図表－4

複式簿記



このシステムは、すべての事業に適用可能なそれである。プーゼは、マイスナーの複式簿記について、単式簿記に対応したかたちで、下記の特徴を掲げている。(s.519～522)

- a) 実務上、複式簿記が必要不可欠なのは、100年間が証明している。それを通して、人々は大きな利点により大規模事業では有利としてきた。小規模事業の取引では、わずかしが適用可能でなかった¹²⁾。
- b) 誤りは単式の方法でよりも容易に避けられる。なぜならば、すべてが他より多く通用するからである¹³⁾。この発見は、しかし、しばしば非常に困難である。というのは、常に多くの勘定に関係するか、または数字を通してのみ示唆されるからである。もちろん、勘定の名称のみで、提供するが、しかし受取る側の勘

定の名称は掲げられない。複式簿記がいいかげんに付けられるか、または故意に誤った項目を差し込むことによりまぎらわしくなり、変造されるならば、この帳簿の調査および適切な分析は、ヘラクレス的な(膨大な)仕事である。

- c) 帳簿の関連性および一致は、複式の方法では確かに見られるが、その際、その作成に注意深く、かつ苦勞することになる。たとえば月次貸借平均表では元帳における債務者および債権者が一致しているとしても、このことだけでは、常に転記が正しくなされてきて、唯一正規に付けられた日記帳および現金帳では、さらに、即座にすべて十分にそこから転記したとの証拠とはならない。
- d) すべてのさまざまな科目よりなる利益および損出の立証は複式簿記の卓越した特質であ

9) 片岡泰彦、前掲論文、s.3

10) 片岡泰彦、前掲論文、s.3

11) 片岡泰彦、前掲論文、s.3

12) 片岡泰彦、前掲論文、s.3

13) 片岡泰彦、前掲論文、s.3

る。複式簿記の元帳は、各々の人名の借方と貸方が均衡しているかどうか、各々の事業の対象が偽りの勘定で示されるように、勘定にもたらす取引先をその正規の勘定に記録すべく、偽りはけっしてもたらされてはならない。当該取引先は、その勘定の借方側および貸方側において、数字と勘定の名付け以外に何もないとすれば、何をいつているのか？取引先は、たぶん、自分が何を取得し、何を与えたか知っていよう。この元帳と並んで、さらに、各々の提供された、および受領した対象をその正確な名称で示すところの、いわゆる当座勘定帳が付けられなければならない。そして、単式簿記の元帳と完全に類似した関係を持たなければならない。

- e) 転記および特に項目の仕訳における場所は、しかし、けっして容易なことではない。もちろん、各々の取引より実際の債務者および債権者に対して、まず始めに、用語“An”をみいだし、その後では“Per”で表示するのは容易に思われるが、しばしば、それにしても、実際に、説明するのは非常に困難である。債務者および債権者を意味する用語“an”および“per”は、初心者にとって訓練を終了するのを保証するのに前もって、非常に多くを習得するのに意義があるとする。マイスナーは、ここで、個人の経験から述べたもので、各々の物事の判断に基づいている¹⁴⁾。

しかし、仕訳帳が適切に作成されているならば、元帳への転記は思い煩うことなく、単純にメカニズム上の仕事である。なぜならば、項目が当該勘定の借方および貸方に記載されているかは、用語“an”および“per”が正確に付されているからである。しかし、我々がそこで複式簿記の固有の元帳をまったく十分と考えとするならば、そこで我々は確かに各々の勘定とそれに対応する勘定を正確でかつ正しいとみなす。それでも、すべてを秘密の闇に包み込んでしまう。なぜならば、数字と勘定の名付け以外に何も解らないからである。

マイスナーは、日記帳または現金帳から元帳の勘定への転記から、もしかしたら介入する誤りの問題、取引が勘定とその数値へと要約する時に取引の実態がみえなくなるという問題を詳細に浮き彫りにしたといえる。

(3) 帳簿における転記

事業が継続するに際して、必ず現金、商品、消耗の負債および積極の負債の取引が多くなればなるほど帳簿において記録を継続して転記することになる。そこで、プーゼは、マイスナーによると、複式簿記では転記による不便および苦勞が生ずるとする。それは下記のような事項であるとする。(s.522)

第1に、記述することおよび仕訳することは、優れて訓練された頭脳を必要とするとする。

第2に、記述することは、明らかに強制された短縮化であるが、非常に重要なことである。というのは、最初の覚え書帳よりもたらされる項目は、特別に備えられた仕訳帳、その次ぎに元帳においてばかりでなく、人名勘定でも、特別の当座勘定でも、記録されなければならない。たとえば、元帳を必要以上に排除しようとするれば、複式の方法に従って、覚え書帳では項目の場所およびさらなる記録が要求される。この記録では、単式の方法に従った簡単な記録よりはるかに苦勞が要求されるとする。

IV イギリス式簿記

マイスナーはドイツ式簿記を模索するに際して、ジョーンズのイギリス式簿記(「図表-1」)を撰取している。そのため、イギリス式簿記を詳細に検討している。その際、マイスナーは、このイギリス式簿記について、誤りが認識されず、すり抜けられるのを不可能とする方法、または従来簿記の方法と結びついたところのあらゆる良くない結果が完全に避けられる方法とは、と問うならば、これらが一般に実務として適用可能であろうかを課題としている。マイスナーは、残念ながら、この問いに“否”と言わざるをえないとする¹⁵⁾。そこで、以下について勘定の設定および運用に関連して問題が発生するとする。(s.523~525)

14) 片岡泰彦、前掲論文、s.9

15) 片岡泰彦、前掲論文、s.16

第1に、帳簿、特に元帳の形式（多桁式）については、一貫して、実務上取引にとって必要なく、証明するのに苦勞するとしている¹⁶⁾。

第2に、帳簿の締切、即ち、決算については、確定した時点を設定しているわけではないとする。その時々要因で決算を引き延ばすこともあるし、近づけることもあるとする。これにより、半年またはまるまる1年で決算するとすれば、元帳の形式（多桁式）により四半期ごとに元帳において欄を設ける場合、各勘定のページで摘要欄を含めて25の欄よりも多くの欄を必要としないところの相互に並べて置かれるシェーマによりみられるとする¹⁶⁾。

第3に、領邦を越えて取引をする時には、他国の通貨が要求される。ジョーンズの収・支では、6ヶ月に限定して取扱っている。最後の第4四半期で決算する場合、通貨の種類ごとに為替換算を要するが、これに対して実際に懸命に取扱っていないとする。これに関しては、取引の債務者および債権者が関係する。ここでは換算に際して、相場に関連するところの為替差損益が認識されることになる。

このような問題提起に対して、イギリス式簿記は必ずしも対応できていないとミスナーは論ずる。(s.525) というのは、ジョーンズのイギリス式簿記は不必要であるところの多くの原因があるが故に、必要ないとするからである。これらの原因について各々の専門家は自らも理解しているというのである。それ故、この著作を判断する目安として個々の誤りが発見されなければならないからだとする。だが、この発見は絶対にあり得ないことである。したがって、私（ミスナー）が単式の方法でも誤りを犯すように、イギリス方式でもありうるとする。実際の取引に対して、一貫して、やっかいなフォームが故に、単純に表面的にみても誤りはあり得るとする。

それについて、ミスナーは、単式記入でも借方にかわって貸方へ、または、逆に日記帳へ項目が欄を変えて記入されるのがどれほど安易に行われるのか、そして同時に、このような方法で、気づかれずに、元帳へ転記されてしまう。それにもかかわらず、特別借方および貸方の額ばかりでなく、中間において集計される額も、かつ日記帳においても並に元帳においても完全に正確に一致してしまうと

いう。さらに、ミスナーは、複式記入に対しても、ジョーンズは反論するのに熱心であるとする。というのは、複式記入でも、こっそりと挿入することによる部下の詐欺、誤りの項目または尊重されるべき、非常に好ましい項目の変更、これらすべてこのことを課題としているからであるとする。しかも、日記帳においても、提供するとすれば、それについて貸方記入し、受け取るとすれば、それについて借方記入するところの正確な原則に従っているにもかかわらずあるとする。(s.525)

特に、ミスナーは、現金の不正に触れている。ここでは、この不正が、意図的にしろそうでないにしろ、そのままにされるならば、現金が現金係のポケットに入るが、帳簿は、それにもかかわらず、まったく一致してしまう。これが簿記方では、特別ジョーンズのシステムでは大きな着服のきっかけを与える主要な状況となる。このことについて、ジョーンズとワグナーは次のように答えているとする。即ち、いずれの主人も、自己の従業員に用心深くなければならない。そして、帳簿は、正確に、項目ごとに概観されなければならない。このことは、いうまでもなく、真実であり、唯一そうするとき、単式記入および複式記入の方法では、イギリス式の方法よりも、あざむかれるのは少ないと言えよう。要するに、誤りがこの方法で行われたとすれば、容易に蓋をされてしまう。もちろん、このことは、しばしばまったく認識されないままで、苦勞なく見出されることはないとする。(s.525)

これらの単式記入および複式記入の方法の優位性に対して、イギリス方式も、下記のように、対策が施されているとする。(s.526~527)

第1に、帳簿の適切な関係および一致（単式および複式簿記のc参照）を考える時、相互に設けられる四半期ごとに締切る元帳の勘定（多桁式）において、特殊な処理が基礎となっている日記帳および元帳の一致に依拠することで明らかであるとする。

第2に、損益を算定する時（単式および複式簿記d参照）、イギリス式簿記は全体として単式の方法で行われていたとする。複式の方法でのように、個々の部分を総合して行われていなかった。即ち、イギリス式簿記は、日記帳において総合的に損益が算定

16) 片岡泰彦、前掲論文、s.17

されている。さらに加えて、商品のみが棚卸されるため、商品在高帳においても利益が算定される。それ故、ジョーンズのイギリス式簿記では、日記帳における利益は商品在高帳の利益と一致する。そのため、商品在庫の様々な区分において、商品在高帳を通じて、その保持している在庫の増減が証明されなければならないとする。

第3に、日記帳から元帳への転記（単式および複式簿記のe参照）についてである。この転記は単純であり、かつ容易であり、多くの科目のもとで、正しいものを間違えることはない。したがって、ジョーンズは帳簿の締切に大きな価値を置いているとしている。それについて、ジョーンズは常に最も速やかに、かつまったく誤りなく締切ができるという。これには常に財産目録の作成が係わっている。さらに、これにはその他の簿記の方法でも、決算をいつでも早くかつ正確に行うことと同じであるとする。さらに加えて、科目を相互に並行して設定することの困難さが元帳において生ずることがある。というのは、四半期で科目がいっぱいとなれば、再び新しい科目、即ち、勘定が設けられなければならないとする。

マイスナーは、これまで、単式簿記、複式簿記の優位性を考慮しながら、ジョーンズのイギリス式簿記を思考してきた。以下、イギリス式簿記に依拠しながらドイツ式簿記を展開する。

V 新しいドイツ式簿記

(1) ドイツ式簿記の特徴

ブーゼは、マイスナーのドイツ式簿記について5つの特徴を論じている。それは以下の通りである。(s.527～528)

第1に、実務的に適用可能である。なぜならば、簿記は、単純な様式に基づいて操作することへと導いているからである。それは日記帳、現金帳及び元帳を単式の処理様式で記録する以外のなにものでもないとしている。このドイツ式簿記のシステムは、前述の「図表-2」となる。この日記帳および現金帳は仕訳帳の機能を備えている。そして、元帳へ転

記される¹⁷⁾。

第2に、このシステムは、誤りの回避およびその迅速な発見を高度に気付かせる。なぜならば、意義ある明確な、相互に対応する額の概観、およびその各々のページの相互関係は、誤りが気付かれずにすりぬけられるのを不可能とするからであるとする。したがって、借方と貸方の間の間違っただ振替はあり得ないし、相対応する勘定を概観するため、勘定が一方では書き加えられ、他方では削除されることはあり得ないとする。

第3に、ドイツ式簿記の3つの主要な帳簿は、上述のごとく、関連する調整された全体を形成している。したがって、正確な、日記帳および現金帳と元帳の一致、即ち、完全な確証をもてる一致からもたらされる納得のいくシステムであるとする¹⁸⁾。

第4に、損益の証明は、(ジョーンズのように総合的に損益が算出されるのではなく)多くの個々の対象を想定しており、広がりを持つものである¹⁹⁾。

第5に、元帳への転記は容易であり、その締切もそうであるとする。その帰結するところは、元帳が事業すべての対象をそれ自体により把握できるとする。そして、実証自体を通じて完全に得心させるように、あらゆる重要でかつ確実な情報をもたらすとする。

(2) 日記帳、現金帳および元帳

マイスナーは、ブーゼによれば、どこに同じ取引が記録され、勘定が設けられるか、日記帳または現金帳から元帳への具体的な説明のため、イギリス式簿記を前提とした。ただし、イギリス式による偏向および仮想を可能な限り取り除いているとする。(s.529)したがって、イギリス式簿記の日記帳でみられるような取引記録の仕訳がみられる特異な様式ではなく、単式簿記および複式簿記でみられるような様式をイギリス式簿記に取り入れているとする。これについて、ドイツ式簿記の特徴とは、ヒングステッドにより見出された見解によれば、下記の通りである。(529)

ヒングステッドは、ブーゼによれば、マイスナーにとって、小さな事業の帳簿ではこのような様式で

17) 片岡泰彦、前掲論文、s.17

18) 片岡泰彦、前掲論文、s.21

19) 片岡泰彦、前掲論文、s.22

記録されるとし、誤って認識されることがないかであって、したがって、大規模事業および何らかの重要な事業で発見されるものにはまったく適用されず、それ自体はまったくたいした事なく、簿記についてのあらゆる識者には明らかとなっているとする。(s.529) これについて、大規模事業と小規模事業における諸帳簿の意義を下記の項目にまとめている。

第1に、大規模事業でのように、完全に日記帳を拡張して、すべての仕入帳、売上帳、経費帳等々の用語の連携によって正確に付けるという状況にあるというのは、小規模事業ではみられないとする。要するに、大規模事業では、一度にもたらされるところの多くの事項を日記帳に付けなければならないとする。したがって、大規模事業では、小規模事業とは異なり、日記帳の広範な拡張を必要とする。

第2に、困難なのは日記帳係である。マイスナーは日記帳係と簿記方とは担当箇所が異なる。そのため、日記帳係は複式簿記のスタイルとともに完成されるところの本来の簿記方ではないことによる困難に出会うことを認めている。日記帳係が簿記のシステムを知らないとするれば、簿記方の要請を完全に理解しているかどうかということになる。

第3に、上記に関連して、簿記方または元帳の記録係から見る限り、日記帳または現金帳について、それから何も蒐集できないとするれば、転記は困難に遭遇することになるとする。

ブーゼは、これらのマイスナーの特徴について下記の5項目にまとめている。(531)

その1は、本来の日記帳が事業の多様性および規模に応じて適切に分解される時、そして大規模事業では必要となるように、様々な簿記方の助けにより付けられるならば、マイスナーにより論じられた新しい日記帳の形式は、まったく正しく仕訳帳の位置を、単式簿記ばかりでなく、複式簿記でも、明確にできるとしている。

その2は、このような日記帳の作成は、専門家に委ねられる。そして、従来の仕訳帳を月ごとでなく、週ごとに、または、もっとよければ、日ごとに作成するならば、日記帳はそれに応じて作成されなければならないとする。

その3は、商品在高帳は、この新しい仕訳帳を通せば、出・入を示す仕入帳の写しよりも不要だというわけではないとする。この帳簿は商品勘定

を完全にその現在の内容で元帳へもたらすことになろうとする。それ故、これを通じて、さらに、延長して運用するのではなく、拡大させようとする。マイスナーはこれを彼の元帳において推挙しているとおもわれる。なぜならば、彼は布 (Tuch)、ワイン (Wein)、現金 (Kasse)、とりわけ商品に対して利用しているからである。

その4は、複式簿記は、大規模の、かつ非常に複雑な、または異質の事業では、従来の仕訳帳を簡略化した複式簿記を適用することが、まったく有利になることにはならなかった。そうだとすれば、複式簿記は元帳の勘定を非常に拡大し、そして、しばしば従来の処理方法をとるとすると、多くの元帳および簿記方をもたなければならないことになる。それ故、その数がさらに増大するであろうとする。

その5は、その4に対して、ある場合には、数少なく、ある場合には、複式簿記そのものと同様の様式で、または同種の事業を営んでいる事業群では、製造業者等々のように、多くの他の市民の生業において、推挙されるとする。

(3) ドイツ式簿記による決算

マイスナーは、決算に際して、元帳の勘定の締切と同時に、これらのうち費用項目および収益項目を抽出し、損益勘定 (Gewinn und Verlust=Conto) を作成し、さらに、動産および債務者の項目と債権者および資本金の項目を抽出し、一般貸借平均表 (General Bilanz) を作成している。いづれにしても、仕訳帳において仕訳をし、この決算で元帳の諸勘定からの振替はなされていない。

元帳の諸勘定を平均して締切の際に、損益勘定の関係する勘定では、商品勘定については、貸借平均するならば、利益がでるとすれば、借方に差額がでる。さらに、事業用経費および家計費等々の勘定では、貸借平均するならば、貸方に差額がでる。そして、これらの差額を蒐集して損益を算出するならば、仕訳をせずして蒐集することにより、借方に収益項目が、そして、貸方に費用項目が転記されることになり、損益勘定では貸借が逆となっている。その最終の利益は、借方の収益が貸方の費用より大きいので、貸借平均すると差額が貸方に生ずる。この差額が利益を示す。貸借平均表に关系する勘定では、借方では動産および債務者の勘定あり、そし

て、貸方では債権者および資本金の勘定がある。動産および債務者の勘定は、貸借平均すると貸方に差額が生じ、債権者および資本金の勘定は貸借平均すると借方に差額が生ずる。これらの差額は、そのまま、貸借平均表に蒐集されずに、差額とは反対側で蒐集される。その帰結として、借方の方が貸方より大きく、貸借平均するとその差額が貸方に生ずる。この差額が利益を示す。そこで、損益勘定の利益は貸借平均表の利益は一致する²⁰⁾。しかしながら、損益勘定も貸借平均表も利益が同じく貸方で算出されるのは矛盾すると言わざるをえない。

このように、損益勘定および貸借平均表を作成する方法は個別表示のそれである。この方法によると、損益勘定では、個々の費用の項目および収益の項目を蒐集して利益が算出される。そして、個々の動産および債務者の項目および債権者および資本金の項目を蒐集して貸借平均表が作成される。この方法こそミスナーが求めてきたそれといえる。

それに対して、一般貸借対平均表という一表が作成され、その中で利益も算定される方法は総合表示のそれである。この表示方法はジョーンズの日記帳で見られる利益計算のそれと同様である。この一般貸借平均表は貸借平均帳 (Bilanz=Buch) よりもたらされる月ごとの借方合計と貸方合計が記載され、つぎに、現金および商品の期末在が高が借方記載され、この借方の総合計の方が大きいので、貸方合計が控除された差額が利益として当該貸方に貸借一致させて締切られる。一般貸借平均表は、ミスナーは、ジョーンズにしたがえばこのようになるとしたものである。したがって、ミスナーは、上述の個別表示を探究したものとと言える。

VI 結 語

ミスナーは、ジョーンズのイギリス式簿記を撰取し、ドイツ式簿記を完成させた。それ故、形式的には単式簿記ではあるが、内容は複式簿記である。したがって、両者を統合させている。その際、日記帳では、ミスナーは、ジョーンズの「仕訳帳の日記帳」を撰取している。しかしながら、ミスナーは、形式は記述するそれをとっている。加えて、決算においては、ジョーンズが日記帳そのものにおい

て利益を算定しているのに対して、元帳の諸勘定から誘導される損益勘定および貸借平均表において利益を算定している。この際、ミスナーは、ジョーンズと同様の勘定を設定しており、次期に繰越される項目は現金、商品、債務者および債権者であった。したがって、事業を営むのに動産および不動産が登場してくるが、両者では扱われていない。

ミスナーは、簿記を論ずるに際して、単式簿記、複式簿記およびイギリス式簿記を論究した後、彼の主張であるドイツ式簿記を展開している。それをまとめてみると以下ようになる。

第1に、単式簿記を応用したことである。ミスナーは、日記帳と現金帳について日記帳から分離した現金帳を取引の記述のために用いた。ジョーンズでは、現金取引、債務者および債権者との取引が日記帳で仕訳とともに記録され、相対応する勘定は記録されなかった。そして、ジョーンズはそれらの取引を日記帳から元帳へ転記した。相対応する勘定については商品在高帳で処理された。ミスナーはジョーンズ同様の様式で記述形式による仕訳をした日記帳を採用し、仕訳帳を省略して元帳へ転記した。したがって、ジョーンズ同様、商品在高帳を必要とした。その意味で、様式上も両者は同一であり、単式簿記を取り入れたといえる。また、両者とも、複式記入の考え方を一貫させており、その意味では同じである。

第2に、複式簿記を適用したことである。ジョーンズにしてもミスナーにしても様式は単式簿記である。だがしかし、どうみても、大規模事業の、複雑な取引では帳簿の形式より照らしてみても、ミスナーの日記帳の形式より読みとれるように、単純化したために、即ち形式上仕訳帳を省略したために、機能的に仕訳帳が独立していないため、多くの欠陥または煩わしさを内包している。ここでの日記帳は、したがって、取引を仕訳するが、要素を借方と貸方に分解し、まさに複式記入で示しているそれであることである。そのことは元帳においても貫らぬかれている。

第3に、ミスナーは元帳の諸勘定よりもたらされる損益勘定と一般貸借平均表を作成している。これらでは利益も算出している。それに対して、

20) 片岡泰彦、前掲論文、s.23

ジョーンズでは、日記帳において利益が算出されている。将来に向けて、一般に適用されるか否かについては疑問がこのころ。だが、この利益の算出は小規模事業への適用に限定されよう。

第4に、マイスナーは決算に際しても、もうひとつの決算について示している。ジョーンズは、日記帳において勘定および補助簿よりもたらされる情報に基づいて決算が行われている。その日記帳において仕訳が行われるが、一方は示すが相手方は示されず、商品を除き、現金、債務者及び債権者のみしか示されない。日記帳における決算は、3ヶ月の各月ごとの借方合計および貸方合計をし、借方において商品在高を加算し、その合計より貸方合計を控除して利益を算出している。加えて、商品在高帳でも利益が算出されている。その際、両者の利益は一致する。マイスナーは、ジョーンズの日記帳と同様の方式でもうひとつの一般貸借平均表において利益を算出している。この平均表は現金、商品、債務者および債権者の勘定残高の借方合計より貸方合計を控除して利益を算定している。このもうひとつの決算は、ジョーンズの日記帳の方式に従えば、可能であることを示唆するものであろう。

当著（1803版）では、勘定としては現金、商品、債務者および債権者のみで処理されてきたが、改訂版（1833版）では動産たる「用具勘定（Utensilien = Conto）」が登場してくる。その際、この勘定の減価償却を考慮すれば、マイスナーは、ジョーンズのように、商品在高帳では利益の算定は不可能になる。それ故、マイスナーの利益の算出にも影響しよう。このことは、ジョーンズのような利益の算出ではなく、用具勘定を包含する決算へと簿記・会計を一步進めることになろう。

拙稿

松尾憲橘・百瀬房徳訳（1985）「貸借対照法の論理」森山書店（クノー・バルト著）。

百瀬房徳（1998）「貸借対照表法の生成史—プロイセン一般国法の形成過程—」森山書店。

—（2002）「体系複式簿記」（初版）森山書店。

—（2009）「体系複式簿記」（改定版）、森山書店。

- （1976）「決算制度確立以前の時代」『獨協大学経済学研究』第17号。
- （1983）「プロシア一般国法の会計規定の起草者」『獨協大学経済学研究』第32号。
- （1987）「プロシア一般国法における計算規定の形成」『獨協大学経済学研究』第22号。
- （1989）「プロシア一般国法における商人の法の位置付け」、『獨協大学経済学研究』第53号。
- （1993）「プロシア一般国法における商業帳簿」『獨協経済』第60号。
- （1996）「プロシア一般国法における評価問題」『獨協経済』第62号。
- （1996）「ストリッカーの簿記」『獨協経済』第63号。
- （1997）「ルドヴィシの簿記」『獨協経済』第65号。
- （1997）「サヴァリイよりルドヴィシに伝えられた二つの財産目録」『獨協経済』第66号。
- （1997）「プロシア一般国法の会計規定の生成過程」『会計史』（会計史年報）。
- （1998）「18世紀におけるドイツ会計の生成とその背景」『獨協経済』第67号。
- （1998）「マーゲルセンの簿記」『獨協経済』第64号。
- （2001）「マーゲルセンにおける損益勘定」『獨協経済』第74号。
- （2001）「財産目録の位置付け」『会計』森山書店。
- （2004）「会計制度創始期における評価」『獨協経済』第78号。
- （2007）「ロイヒスと彼の著作」『獨協経済』、第84号。
- （2008）「総記法の歴史的意義」『会計学の諸相』白桃書房。
- （2008）「ロイヒスにおける決算手続」『会計総合研究』会報。
- （2009）「ロイヒスにおける複式簿記」『獨協経済』第86号。

- (2014)「ロイヒスにおける単式簿記」『経営論集』第61巻第1号、明治大学経営学部.
- (2014)「ドイツにおけるジョーンズの簿記とその評価」『獨協経済』第88号.
- (2015)「ワーグナーの複式簿記」『獨協経済』第97号.
- (2016)「ゲアハルトの簿記の基礎」『獨協経済』第98号.
- (2017)「ゲアハルトの簿記の実践」『獨協経済』第100号.
- (2017)「ゲアハルトの簿記の制度への対応(1)」『獨協経済』第101号.
- (2018)「ゲアハルトの簿記の制度への対応(2)」『獨協経済』第102号.
- (2018)「ヒングステッドの単式簿記およびイギリス式簿記の検討」『獨協経済』第103号.
- (2019)「ヒングステッドの複式簿記」『獨協経済』第104号.
- (2019)「ヒングステッドの複式簿記の事例」『獨協経済』第105号.
- (2020)「ブーゼの基礎となる財産目録」『獨協経済』第106号.
- (2020)「ブーゼの決算処理およびその関連事項」『獨協経済』第107号.
- (2020)「ブーゼの複式記入と勘定」『獨協経済』第108号.
- (2021)「帳簿在高と実際在高」『獨協経済』第109号.
- (2021)「ブーゼによるジョーンズの簿記の解説」『獨協経済』第110号.